

地球は我々皆のもの

大学院自然科学研究科 李 明 燮

最近環境問題を巡るいろいろな言葉がまるで流行語みたいにマスコミや様々な印刷物の紙面を飾っている。特に我々の生命と直接関係のある分野に対してはその関心も深い。それ故に自分たちの自然と環境を守ろうとする各種の運動までも活発に展開されている。その一つの例が反原子力運動である。しかし、地球全般にはもっとひどい現象が目に見えないうちに徐々に進行していることが最近になって大きな問題として浮かび上がってきた。二酸化炭素の増加による地球の温暖化、フロンによるオゾン層の破壊などがその例で、まさに我々を一気に襲おうとしている。

原子力がソ連のチェルノブイリ原子炉事故以来世界各国で大きな波紋を起こし、それらに対する強い反対で結局は原子力発電所の新しい建設を一部中止する国まで出たようである。又我々の皮膚に大きな被害を起こす紫外線の遮断役割をしているオゾン層の破壊を引き起こすフロンガスの生産及び使用を全面禁止するような決定も日本を含む先進国らの環境サミットにより決定された。

このように人間は何かの雰囲気によってすぐにいろいろなことを決定してしまうし、また自分と直接的に関係のない所は無神経になりがちである。地球の温暖化の主犯は二酸化炭素であり、それは石油・石炭などの化石燃料によるものであって、それを避けるためには原子力の使用が避けられないことはあいにく（にも）矛盾している。自分の国の利益のためなら後はどうなってもいいと言うことで最初は公害産業を取り入れ、その後それらによる被害が大きくなってからはそれを他の国に合併会社の形で輸出する。インドでの数千人の貴重な生命を奪ってしまったアメリカのユニオンカーバイド社のボパール事故はこのような事例が引き起こした悲劇で、なにゆえ起こったのでしょうか。そして東南アジアで起こり始まった日本との合併会社周辺の住民の公害による被害はまた何を意味するのでしょうか。自分の国だけが公害の被害から抜け出したら他の国はどうなってもいいと言うことでしょうか。

地球は一つである。いまその被害から自分たちだけが逃げたとしたとしてそれがいつまで続けられるわけではない。いつかはそれが降り掛かって来る。その莫大な被害を受ける前、今からでも一刻も早く我々全人類はお互いに力を合わせて地球環境の回復のため努力しなければならない。特に今になって起こった様々な問題は全ての先進国が自分たちの責任だと思い、これまでよりもっと根本的な対策の手に力をいれるべきであろう。又、全地球環境の保護の次元で、熱帯林の伐採や環境対策のない公害産業に取り組んで自国の発展を図ろうとしている国々を先進国は避難するばかりであり、“対岸の火事”のような態度でなく、もっと積極的にそれらの対策のための資金援助や技術協力をするべきである。そうすることこそ我々の巣であるたった一つの地球は環境の危機を乗り越えてもっと快適で住みよい所に生まれ変わるでしょう。